

報告タイトル

中国国民党と中国青年党の政治思想における類似性についての考察
——「全民政治」と社会民主主義を手がかりに
“Consideration of the Similarity of Political Thoughts between the Chinese Nationalist Party and the Chinese Youth Party : Focusing on “Quanmin” Politics and Social Democratism”

氏名(所属)

衛藤 安奈(東海大学)
ETO Anna (University of Tokai)

要旨(800字程度)

報告者は以前に、満洲事変以降顕著になったとされる中国国民党(以下、国民党)のファシズム的傾向について、柄谷行人の近代批判を援用して次のように理解することを提案した。すなわち、柄谷によれば、近代の本質とは、資本、国家、ネイションの三つの交換原理が接合した国家構造が出現することであるという。この国家構造を「近代の構造」として捉えるなら、当時の国民党のファシズム的傾向は、「近代の構造」を対外的危機(日本の中国侵略)の下で性急に維持強化しようとした実践の帰結として理解できるのではないだろうか、というものである。

本報告では、戦間期から日中戦争にかけて国民党とは緊張関係にあった中国青年党(以下、青年党)にも、政治思想においては国民党との類似性がみられることに注目する。そして上記考察において手がかりとしてきた「近代の構造」という観点を引き継ぎつつ、両党の類似性を、主に「全民政治」と社会民主主義を手がかりに再考することを試みる。

当時の中国のエリートが直面していた「近代の構造」の構築という課題からすると、ソ連や中国共産党の主張する階級革命は、「われわれ」意識をもつネイションの形成を妨げるため、「全民政治」が目指される必要があった。また富国強兵のためには、国民国家の枠組みと結びついた資本主義が必要とされるため、列強が周辺国を搾取するグローバル資本主義や、国内の労働者を過剰に搾取する資本主義は否定されねばならなかった。それゆえ社会民主主義が目指される必要があった。

ただし、この場合の社会民主主義は、富国強兵の手段という発想と結びついているがゆえに、労働者の福祉の確保よりも、国内の労働力や資源を動員して敵を撃退することを優先するファシズムへの横滑りが生じやすいものであった可能性がある。

本報告の結論は以下の通りである。国民党と青年党に共通してみられる「全民政治」と社会民主主義的傾向は、「近代の構造」の構築という課題から半ば必然的に生じるものであった。また対外的な危機に直面する中で富国強兵を目指すという文脈を両党とも共有し、かつファシズムに傾斜する動きは青年党にもみられた。しかし、指導者によるトップダウンの政治によって「近代の構造」をめざした国民党と異なり、あくまでも多党制の枠組みを通じたボトムアップの政治によって「近代の構造」をめざした青年党は、最終的にはファシズムを受容しなかった。